

私学の魂

桐朋中学校・高等学校

「男子」を知り尽くす桐朋が次代を意識して創り上げた本物志向の新校舎から読み取れる「桐朋のアカデミズム」とは

伝統ある男子校として知られる桐朋が、創立 75 周年を迎える 2016 年に向けて、校舎を全面的にリニューアルしました。『次の学びプロジェクト』を立ち上げて、次代の担い手を育てる教育のあり方を検討。『緑で人をつなぐキャンパス』をコンセプトに創り上げた真新しい校舎は、桐朋が理念に掲げる『学問の探究』と『創造の体験』に思う存分取り組めるステージとなりました。

自由闊達ながらも主体性を尊重する校風のもと、一人ひとりが個性を発揮できる環境の中で、時には自分と向き合い、時には仲間と協調して、いろいろなことにチャレンジしながら自分の価値観を構築していく桐朋の 6 年間は非常に充実しています。本物志向の新校舎が完成し、学びの創造が活発化している今、先生と生徒、あるいは生徒同士のインタラクティブな授業もこれまで以上に活気を帯びていて、好奇心をかき立てられるに違いありません。

「想いが結実する喜びを日々感じている」という中学部長の秋山安弘先生のお話を軸に、感性を養い、知性を高める『桐朋のアカデミズム』を紹介します。



中学部長 秋山安弘先生

桐朋中学校・高等学校

DATA
1

- 沿革 1940年 山下汽船株式会社社長山下亀三郎氏からの献金を基にして、財団法人山水育英会を設立する。
1941年 山水育英会を母体として第一山水中学校（国立）、山水高等女学校（調布）を設立する。
1941年 第一山水中学校開校。
1948年 新学制により桐朋高等学校・桐朋中学校に改編する。
1959年 桐朋学園小学校を併設。
1963年 校舎近代化に着手、高校校舎完成。
1966年 中学校校舎完成。
2010年 創立 75 周年に向けて、新校舎建築の概要が決定。
2013年 教科教室棟が完成
2014年 共用棟・高校棟が完成
2015年 中学棟が完成

校長 片岡 哲郎

所在地 東京都国立市中 3-1-10
TEL : 042 (577) 2171
<http://www.toho.ed.jp/>

交通 JR 中央線「国立駅南口」下車 15 分、または立川バス「矢川駅」方面行き「桐朋」下車 1 分
JR 南武線「谷保駅」下車 15 分、または立川バス「国立駅南口」方面行き「桐朋」下車 1 分

よりよい学びをかなえるために。 学びの環境を一新！

桐朋のキャンパスは、武蔵野の面影を残す豊かな樹木が生息する「みや林」により、小学校エリアと中高エリアに分かれています。正門から入ると、右手に広がる中高エリアに新校舎が建ちました。

「新校舎の建築は、50年に一度の大プロジェクトです。私たち教員も学校を創る重要な参加者として校舎建築にかかわりました。具体的には『次の学びプロジェクト』を立ち上げて、新しい時代の担い手を育てるために必要な教育、環境、設備とはどのようなものかについて徹底的に議論を重ねて、設計に反映させました」

ホームルームを中心とした『中学棟』と『高校棟』の間に、食堂を中心とした『共用棟』があり、そこが団らんの場となるように設計されています。教科の専門教室を中心とした『教科教室棟』は、『中学棟』とつながっており、井上大地さん(中3)は「移動がしやすい」「上履きになり、校舎をきれいに保てる」と話します。



中学生も利用できる食堂。明るい雰囲気でおしゃべりも弾みます。

共用棟には、約400名を収容できるホールもあり、随所にゆとりを感じさせる校舎ですが、その敷地面積のおよそ2倍をグラウンド、体育館、プール、テニスコートなどのスポーツ施設に当てているのも桐朋の魅力であり、キャンパスそのものに「自分のやりたいことを見つけて、とことんやり抜こう」という熱いメッセージを感じ取ることができます。

「新校舎は桐朋が理想とする教育を実現できる場。教科教室棟(2013年6月完成)、高校棟・共用棟(2014年6月完成)に続き、この6月に中学棟が完成し、思い描いていた授業ができる喜びを実感しています」



300mトラックも取れる広いグラウンドは男子の憧れ！

CALL教室の充実で、 聞く・話す力をさらに伸ばす

CALL教室で行われていた中学1年生の英語の授業を見学すると、各自がコンピュータに向かい、耳で聴いた言葉を再現していました。英語を発することに恥ずかしさを感じる年代ですが、ヘッドセットをつけて画面に向かうため、それほど周りは気にならないよう。先生のテンポのいい指示に従って、いきいきと取り組む姿が印象的でした。

「中学では英語の基礎力をつけることに力を入れています。特にリスニング力の養成や発音練習を重視しているので、新校舎建築に伴い、CALL教室のシステムを向上させました。例えば、生徒の音声を一齐に録音、



「頭の中に英文をぶち込むぞ！」音声を聞いた後、即座に復唱するシャドーイングにも挑戦。自主練習の後、生徒の音声を録音。回収したファイルから先生が上手なものを選んで聞かせると、「お〜」という感嘆の声。自分も頑張ろうという気持ちになります。

その音声データを回収して採点したり、CALL 教室で英検の模擬試験を行ったり、英語科専用の録音室でネイティブスピーカーの音声を収録し、教材や試験に活用したりと、英語学習の幅が広がっています」

独自の教材づくりに定評のある英語科では、さまざまなトピックやテーマをもとに、英語でディスカッションやディベート、あるいはプレゼンテーションを行う授業にも積極的に取り組んでいます。

「英語科の教員が生徒に読ませたい名作や名演説の原文を集めた自主教材『Toho Reader』では、スタンフォード大学の卒業式で行ったスティーブ・ジョブズの演説が生徒に好評でした。検定教科書にもその断片が載っていることはありますが、実際の原文を最初から最後まで読むと全く味わいが違います。文章を読んだ後で彼のメッセージからどのようなことが読み取れるかを、英語でディスカッションすることもあります。『本物』には生徒の心を揺さぶる力があり、思考力や記述力の向上に役立っています」

桐朋の魅力①

トピック

学問の高みへ誘うオリジナル教材

中学校では基礎力の定着に力を入れています。合わせて1つの課題や問題を多角的に深く考えられるように、多くの教科で自主教材を使用しています。学問的な体系を大切にしているところが桐朋のアカデミズムであり、各教科で、学問の真理に触れることのおもしろさを実感できる場面が多々あります。数学科では自主教材に加え、数学科の先生が執筆した市販の『A級中学数学問題集』を使用し、基礎から発展まで演習を行うことで、確かな力をつけています。



桐朋が誇る『A級問題集』。中1の数学でも生徒のかたわらに。

好奇心を揺さぶる 『本物主義』は桐朋の伝統

『本物主義』は英語科に限ったことではありません。

「桐朋の伝統です。桐朋では、学問の魅力に気づく感性を養うことを大事にしているため、全教科に本物志向の教育が根づいています」

教科の専門教室が集まる教科教室棟がどれほど充実した施設かは、理科系の教室を通して想像することができます。6つの実験室と3つの講義室に加え、プラネタリウムや天文ドーム、太陽観測所もあります。こうした学習施設は従来の校舎にもありましたが、プラネタリウムの投影機にしても、天文ドームの反射式望遠鏡にしても、太陽観測所の屈折望遠鏡と太陽投影板にしても、新校舎建築を機により本格的なものを設置しています。

「天文ドームの反射式望遠鏡が15mm口径から40mm口径に変わるだけで、見ることができる世界は大きく広がります。同じように、すべての教科で設備の充実を図り、授業づくりのアイデアが広がっているため、このタイミングで入学する生徒は、これまで以上に好奇心をくすぐられると思います」



地学に興味を持ち、理解を深めるために欠かせない天文ドームやプラネタリウム等の観測施設。

友達の長所が見つかる 表現・生活系教科

林広嘉さん(中3)は、昨年の音楽の授業で、「楽器演奏の魅力に気づかされた」と言います。音楽科では、仲間と一緒に音楽を創り上げる喜びを味わって欲しいという想いから、1年間かけて器楽合奏を中心とした授業を行っており、生徒はさまざまな楽器の中から1つ選んで練習します。林さんはアコーディオンを選びました。林さんをはじめ、多くの生徒が演奏技術に乏しく四苦八苦するなかで、学年末に行う音楽会で披露する曲が『雷鳴と稲妻』(ボルカ)に決まりました。

「テンポが速く、先生にも『難しい曲だよ』と言われて不安でしたが、音楽会では全員の気持ちがかまとまり、一つの音楽を奏でることができました。その時の感動が忘れられず、(趣味として)他の楽器にも挑戦したいと思っています」(林さん)

新校舎建築における音楽科のこだわりは音の響きでした。音楽室の内装をすべて木製にしたことで、楽器



調理実習では2時間連続の授業で一食分の料理をします。桐朋の家庭科の奥深さをHPで紹介していますので、ぜひご覧ください。

の音が鮮明に響き渡ります。その中で、林さんのように音楽の魅力に気づかされる生徒がいるのですから、本物の力は侮れません。

音楽と同様に、美術、体育、書道、技術・家庭の授業が、非常に充実しているのも桐朋の特色です。

「いろいろなことにチャレンジできるので楽しいですし、そのつど友達に『こんな一面があったのか』と驚かされます。普段は細かいことを気にしない友達が、調理実習で手際よく盛りつけをしていたり、字が汚い友達が、書道で上手な字を書いていたりと、見方が変わります」(井上さん)

取材の案内をしてくれた河村先生も「成績は1つの価値基準にすぎません。学校では成績や運動ができるが目立ちますが、それ以外の特技をもつ子がたくさんいます。実技が多い表現・生活系の教科は、個性を認め合ういい機会になっています」と話します。

「異なる個性をもつ子どもが集まり、刺激を受け合うからこそ、思いがけないことが起こります。おもしろ

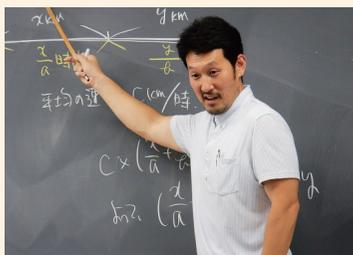


小学校の音楽しか触れていなくても大丈夫。みんな果敢にチャレンジしています。

桐朋の魅力②

子どもの興味をそらさない、先生の“言葉を拾う妙味”

中学1、2年生の間は授業に集中できないこともありますが、桐朋の先生は常に生徒に質問を投げかけ、生徒が発する言葉や意見を拾いながら授業を進めていきます。それが多少質問から離れた言葉であっても、「そうだね」「いいところに気づいたね」と返ししながら本筋につなげていくので、子どもの興味がそれません。国語の授業では、人物を便覧で調べた後に「実は校歌を作詞した人。生徒手帳を見てごらん」と言うと、「本当だ!」と目を輝かせる生徒たち。インタラクティブな授業が、生徒の意欲を引き出しています。



緩急をつけて生徒を引き込む数学の授業



生徒の声を丁寧に拾う国語の授業

トピック

いものが生まれるのです。桐朋では、多様な個性をもつ生徒同士のコミュニケーションを通じて、豊かな人間性を育むことを教育目標としています。高校での募集が続いているのも、高校で文系・理系別にHRクラスを分けないのも、そのためです。卒業後にクラス会を開いた時に、医者もいる、弁護士もいる、研究者もいる、アーティストもいるというようなバラエティに富んだクラスのほうが刺激的ですし、考え方や人間の幅も一層広がると思います」

生徒による創造的な活動を支援する多彩なフリースペース

多様なコミュニケーションを実現するためのスペースも、意図的に設けられています。その一つが、中学棟と高校棟を結び、共用棟の屋上(2階)を活用したオープンテラスです。

「ウッドデッキなので上履きのまま屋外に出られます。随所にベンチが設置されているので、息抜きの場としてはもちろん、語らいの場としても定着し、青い空、木々の緑、心地よい風に感化されて、新しいアイデアがひらめくことを期待しています」

ひらめいたアイデアをカタチにする場としては、共用棟の『多目的ラウンジ』や中学棟の『関心ラウンジ』があります。

「どちらも開放的で、通りがかった生徒が気軽に立ち見ができるようなスペースなので、型にはまることなく、私たち教員が思いも寄らない自由な発想で、創造



中高生が交わるオープンテラス。高校生をロールモデルに成長していきます。

的な活動が展開されることを期待しています」

『多目的ラウンジ』の、ホワイトボードを背に写真を撮っている高校生がいたので理由を尋ねると、「生徒会が主催する『生徒による授業』のチラシ用の写真を撮っている」と言います。

「桐朋では生徒発案の企画が持ち上がるのは日常のこと。実はこれまで、多人数の生徒が一堂に会しているいろいろな集会ができる場所がなく、小学校の講堂を利用していました。新校舎建築に伴い、共用棟に約400名を収容できるホールができたことで、講演会、映画会、討論会などを催す機会がますます増えるであろうと期待している中で、高1の生徒が『ショートフィルムフェスティバル』という企画を立案。短編動画を制作し、みんなで鑑賞するだけでなく、プロの俳優や演出家などを招いて講評をいただきました。プロの方々とのディスカッションも、大変有意義だったようです」

社会人の“核”をつくる桐朋の教育に注目！

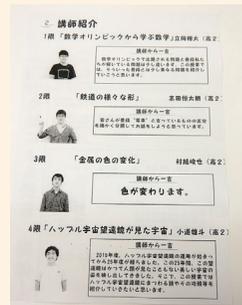
樹木の緑を目の当たりにできるもっともよい場所には図書館ができました。昼休みになると、多くの中高生が図書館に集まり、興味のある本や雑誌、DVDなどを見て過ごします。まるで我が家のようにソファアに

桐朋の魅力③

トピック

創造的活動を促す、自由闊達にして自主性を尊重する校風

「生徒による授業」は生徒会が企画、主催するイベントです。生徒自身が先生になり、自分の興味のあるテーマで講義をします。先生を募集し、講義内容が決まったら聴講生を募集しなければならないので、宣伝用の写真を撮っていたのです。こうした生徒による、生徒のための創造的活動が歓迎される校風が桐朋の魅力。社会に出てからも、こうした企画を立てて、運営する力は太りに役立つはず。



6月に開催した「生徒による授業」の内容は「数学オリンピックから学ぶ数学」「鉄道の様々な形」「ハッブル望遠鏡が見た宇宙」など多彩。

もたれかかり、好きな本に熱中する。こうしたくつろぎのひとときがあるからこそ、予鈴がなると気持ちを切り替えて授業に臨めるのでしょう。

『みや林』に面した極上の窓辺には自習スペースがあり、昼休み後、授業がない高3の生徒が黙々と勉強していました。

「進路にかかわる行事は高1から始まりますが、『進路』は人生を決めることなので、高1の成績で早急に決めるようなことはしません。高1で「私の将来」という題で作文を書かせて文集にまとめたり、卒業生のお話を聞く機会を複数回経験させることにより、時間をかけて自分がやりたいことしっかり考えさせています。周りからの目や自分のその時点での成績といった外部的な要因だけに左右されるのではなく、自分にとって本当にやりたいものを考えさせ、自分の将来を自分で決めて、その目標に向けて一生懸命に挑戦させることが大切なのです。その意味で、進路決定をする高3生にとって教員はよき相談相手です」

こうした信頼関係を築けるのは「学年の担任集団が6年間持ち上がるシステムが大きい」と秋山先生。

「担任は6年間ひとりひとりの成長を支えていきます。卒業生も喜んで手を貸してくれるので、大学の学部調べにしても、さまざまな分野の大学教員が来校して、後輩のためにざっくばらんに話をしてくれます。そういう意味では非常に恵まれた環境の中でじっくり考えて進路を決めることができていると思います」

多感な時期に、社会人の“核”となる、豊かな心と高い知性を育み、創造的な活動ができる人に育てる『桐朋教育』により広く触れてもらうために、来春(2016年)の入試では2月1日(定員110名)に加えて、2



中高生の行き来が盛んな図書館。蔵書は6万5000冊。雑誌やマンガもあります。



高3の活用が目立つ自習スペース。人生に揺れている高1の夏に書く「私の将来」という作文集は、30～40年分が進路指導室に保管されており、自由に閲覧できます。進路決定は6年間の学びの集大成。自分で考え、自分で判断し、自分で行動する姿勢を活かして、受験勉強を加速していきます。

月2日(定員70名)にも入試を実施します。この機会に、桐朋のアカデミズムを感じ取ることができるキャンパスに足を運んでみませんか。

自分を奮い立たせるために 生徒会長に立候補!

VOICE

井上大地さん
(中3/中学生徒会総務委員長)

僕が桐朋に入学したのは、5歳上の兄が桐朋に通っていて、頭がよく、かっこいいなと思っていたからです。バスケットボール部に入部しましたが、1年で退部し、このままではいけないと生徒会の総務委員長に立候補。林くんの応援を得て当選し、新校舎の初代委員長になったので、生徒の声を少しでも先生に届けて、生活しやすい桐朋にしていきたいと思っています。



学校のサービス活動に従事。 卓球台も貸し出します

VOICE

林元嘉さん
(中3/中学生徒会総務委員)

井上くんに誘われて総務委員になり、野球部とかけ持ちで頑張っています。傘の貸出や、旧校舎では卓球台の貸出をしていましたが、引っ越しのため昨夏から休止しているので、先生と話し合い新校舎でも実施する予定です。桐朋は授業が難しいですが、きちんと予習をすれば大丈夫。いつも素のままなので、真のつきあいができるところが男子校のいいところだと思います。

